

エッセイ

―モンゴル紀行（九）―

スーホの黄色い馬

浦野 裕司

「南ゴビってどんな所？」と尋ねられて、「三六〇度、見渡す限り、砂漠や大草原が広がっている」と話すと、たいていの人には「そんな場所に行ってみよう」と、うらやましそうな顔をする。しかし中には「何しにそんな所に行くの？」と、不思議そうな反応をする人も。「何にも無いんですよ。何度も行くなんで理解できない」と返してくる。そんな人に対して、「何も無いように見える自然の中でも生きていく人たちがいてね、その生活が…」などと説明しても、なかなか分かってはもらえないのだろう。

今回のツアーは総勢十一人。二年前のツアーで、モンゴ

場にある。二人は、私が十六年前に初めて南ゴビを訪問して以来の友人であるとともに、最も信頼できるモンゴル人である。

陸路を南ゴビへ

シヤガイさんから「今年は南ゴビが人気で、行きの航空券がとれません。キャンセル待ちです」と連絡が入ったのが六月半ばのこと。キャンセル待ちするくらいなら片道は陸路がいい。かつては道無き道を行くような厳しいルートだったが、現在は道路事情がよくなり、途中で休憩を入れなくても片道八時間くらいという。十年前、片道二十二時間かけてバスで往復した時と比べれば夢のようだ。飛行機で行くよりもモンゴルの広さ、自然の変化などがよく分かるから、かえって参加メンバーも喜んでくれるはずだ。

八月十一日、午前八時過ぎ、ウランバートルのホテルを出発。郊外にある大型スーパーに立ち寄り、キャンプ地の生活に必要な食料品を買い込む。キャンプ生活と言っても、遊牧一家の近くにゲルを組み建ててもらい、食事は三食付きだ。買い物を中心は、ミネラルウォーターと缶ビール、それに忘れてならないモンゴルウオッカ（アルヒ）。あとは、それぞれが食べたいお菓子、といった程度だ。

今回、私たちを南ゴビまで運んでくれたのは、南ゴビか

ルの自然や遊牧生活を送る人々の生き方にすっかり魅せられてしまった仲間五人と私。それに「一度はモンゴルに行ってみよう」と憧れを抱いている人たち四人。さらに、現地で案内してくれるモンゴル人のシヤガイさん。彼はふだん、日本で仕事をしているが、夏の間は日本人旅行者をガイドするためにモンゴルに滞在している。それゆえ、ウランバートル・チンギスハン空港で落ち合うことになる。南ゴビでは、ボルト先生が様々な便宜を図ってくれる。ボルト先生は、ハンホンゴル芸術専門学校の校長を務めた後、今は南ゴビ県の教育委員会で県内の学校を統括指導する立

らやってきた乗り合いタクシーだ。トヨタ・アルファードのハイブリッド車が二台。型は少し古いのが、乗り心地はまずまず。五百四十キロの道程を、買い物・昼食・休憩の時間を除けば正味六時間ほど走る。ということは、平均時速にすると九十キロ。片側一車線、中央分離帯の白線も無く所々舗装が剥けているような道路を、高速道路のような速さで走り抜けるのだ。あたり運転などは決してしない。なぜなら、前に遅い車がいると躊躇することなく追い越しをかけるからだ。モンゴルは右側通行なので、右ハンドルの日本車だと追い越し際に対向車が見えにくい。対向車線に出たと思ったら、猛スピードで向かって来る対向車が目の前に迫る。助手席に座っていた私は、初めのうち生きた心地がしなかったが、慣れてくるとスリリングで楽しくなった。遅い車が前を走っていると、「いけー」と心の内で叫ぶようになるまで、そう時間はかからなかった。

ほぼ中間地点のマンダルゴビの町で、少し遅めの昼食を取る。予定していたレストランが休みで、ほかの店を探すがドライバーに「ゲダス・ウブスジ・バエン」と腹をさすりながら言うと、一瞬きよんとした表情を見せた後、大笑い。私が哀れな顔をして、たどたどしいモンゴル語で「おなかがいい」と言ったのがよほど可笑しかったらしい。空っぽの胃袋に、肉入りの焼うどんは実に美味しかった。

食後、ふと別席で食事していたドライバーの方を見ると、彼は腹をさすってから「うまかっただろう。腹いっぱいだよな」とばかりに親指を立てた。私も同じ仕事で返すと、再び大笑いしていた。

昼食後はまた、ハンホンゴル村に向かって南下する。居眠りすることなく、というよりスリルと興奮で居眠りなどできるはずもなく、目を見開き続けた。ホテルを出てから八時間半、ハンホンゴル村への分岐点に着いた。ロシア製四駆ワゴン車と、プリウスが待っていた。プリウスはボルト先生の自家用車のような。どうやら初代のプリウスらしい。ということは二十年以上前のもの。道路事情の悪いこの南ゴビで元気に走り続けているのは驚異だ。

モンゴルではハイブリッド車が大人気。ガソリン代が高いから燃費のいい車が好まれるのだらうと考えていたが、ハイブリッド車人気の理由はそれだけではないらしい。冬場にエンジンがかかりやすいのだと言う。モンゴルの冬はマイナス三十度にもなる。普通車のバッテリーでは、始動できなくなることもある。なるほど、納得である。

ロシア製四駆ワゴン車の方はと言えば、最近、観光客に好評なのだそう。これに乗ってモンゴル国内を巡るツアーが、ヨーロッパ人の中で流行しているらしい。何十年も変わらぬデザイン。電子部品など使わぬシンプルで修理が

容易なエンジン。車高が高くホイールベースが短いから、相応な悪路でも走破できる。さほど大きくないのに、人も荷物も信じられないほどたくさん積める。ただし乗り心地は最悪で、クーラーも無い。おまけに窓は手で押さえないとすぐに閉まってしまうこともあるし、ドアの開け閉めもコツと腕力が必要だ。そんな車だが、いや、そんな車だからこそ郷愁と冒険心を刺激される。

分岐点で出迎えてくれたのはボルト先生とその娘、ジャガー。それに四駆ワゴンのドライバー、メガさん。ミニバンの荷物を積みかえて、ハンホンゴル村の遊牧家族の宿营地へ向かう。



トクトホ一家の宿营地で

二年前にお世話になったのは、遊牧で生計を立てているトクトホ一家だ。父親、母親と三人の息子たちの五大家族。助け合い信頼し合って生きているのがひしひしと伝わってくるような、実に素晴らしい遊牧一家だった。

今回の「南ゴビツアー2019」を企画した当初から、「ぜひまた、トクトホ一家にお世話になりたい」とボルト先生に伝えていた。南ゴビは厳しい自然環境なので、少しでも良い草を求めて遠くまで移動しているかもしれない。しかし幸いなことに、今回もトクトホ一家にお世話になることになった。一刻も早く現地に着きたい。

車乗り換え分岐点から一時間弱で、トクトホ一家の宿营地に着く。二年前と同じ場所だ。彼らのゲルから西に百メートルほど離れた所には、私たちのための二棟のゲルが建っていた。

荷物を下ろす際にトラブルが発生。Bさんが「私のスーツケースが無い」と騒ぎ出した。「え、そんなはずは！」と他のメンバー。たしかに少し目立つカバーを被せた彼女のスーツケースが無い。ボルト先生が困り顔で、乗り合いタクシーのドライバーに電話をする。シャガイさんは、ウランバートルのホテルに。しばしやり取りした後、二人は

同じように横に首を振った。ウランバートルでも、分岐点でも数を確かめていたのだから当然だ。皆、キツネにつままれたような気分。当の本人は途方に暮れている。

改めて個数を数えてみると、数はちゃんとそろっていた。「ちゃんと数はあるんだけど…」の声に、Bさんは「あっ！」と叫んだ。「カバー外したの、忘れてた！」の一言に、どよめく草原。近くの山羊たちは「メ〜ワク」とばかりに、草を食むのを止めてこちらを見ている。そういえばBさん、前回のツアーでは、クレジットカードを紛失して、大騒ぎになったつけ。今回はひと騒ぎしただけで終わって何よりだ。

この日、トクトホ一家は山羊や馬の世話で忙しく、ろくに挨拶もしないまま夕食となった。四泊五日の間、私たちの食事を作ってくれるのは、学校給食の調理員をしているというバイラさん。高校生のジャガーも手伝う。宿营地での最初の食事は、山羊肉のスープとご飯、フライドポテトに、ミニトマト・キュウリ・ニンジンサラダ。スープはあつさりした味付けで、野菜は彩り豊かでみずみずしい。

夕食を終えて外に出ると、月が出ていた。いつの間にか、月明かりのもとでの合唱が始まった。薄い雲に隠れた月は、「見上げてごらん夜の星を」を合唱する私たちを優しい光で包んでくれた。翌朝、早起きしてみると、トクトホのゲ

ルの外で山羊の解体が行われていた。一人で見ているのはもったいない。ゲルに居る皆に声をかけた。山羊の解体を初めて見る人たちは、息を凝らしてその様子を見守る。二度目の人たちも同じだ。先ほどまで草原で草を食べていたであろう山羊が、皮を剥がされ肉の塊になっていく様子は、何度見ても「命を頂くための神聖な儀式」のように感じられる。

朝食を終えた頃、つい先ほどヤギの腹から取り出されたばかりの新鮮な内臓が塩茹でにされ、私たちのゲルに運ばれてきた。皆、その美味しさに驚いていた。食休みした後、正式にトクトホのゲルを訪問。再会



を喜んだ。ゲルではさつそく馬乳酒（アエラグ）がふるまわれる。馬乳酒を継ぎ足すのは母親のオユントヤ。二年前と変わらず奥ゆかしく、笑顔が素敵だ。馬乳酒の椀がひと回りすると、今度はトクトホが嗅ぎ煙草の入れ物を出して皆に回す。石で作られたトクトホ自慢の入れ物と、独自の調合の嗅ぎ煙草の香りを楽しませてもらう。次男のトクシンは、見事な馬頭琴の演奏を披露してくれた。

午後は、ラクダを見に行くことになった。訪問したゲルで迎えてくれた老夫婦には、見覚えがあった。向こうも覚えていたようで、「お前の仲間で、落馬した日本人がいたなあ」と可笑しそうに話す。十二年も前のこと。いつまで経っても友人の落馬事件は話の種のようなのだ。

ゲルには笑顔のかわいい女の子がいた。老夫婦の孫らしい。名前はモンゴル語でウサギを示すブツチン。七歳だ。人懐こくて好奇心旺盛。メンバーの一人がお土産に持って行った竹とんぼに興味をもって、繰り返し飛ばしていた。始めのうちこそ足元に落ちていたが、瞬く間にうまくなり、竹とんぼは広い空を舞った。

ゲルの主人がラクダに乗せてくれるというので、ラクダが繋がれている場所まで移動する。交代でラクダに乗せてもらっていると、ジープがやって来て近くに止まった。降りて来た青年は、十二年前にお世話になった遊牧一家の息

子。私の大切な友、今は亡きバットウンスレンの次男だ。懐かしそうに握手を求めてきた。当時、中学生だった彼は今、南ゴビの観光ガイドをやっているという。機会があれば、彼にも南ゴビをガイドしてもらいたいものだ。

バットウンスレン一家もトクトホ一家に負けず劣らず、すばらしい家族だった。二年前には、お悔やみの気持ちを伝えるに一家を訪問した。バットウンスレン亡きあとも、彼の妻や息子たちが力を合わせて大遊牧一家を支えている。家族のだけれどそれぞれ個性のかつ素晴らしい人柄で、いつ会っても心が洗われて素直な気持ちになれた。

この日の夕食は特別料理。山羊肉を炒めた後、ジャガイモやニンジンも加えて鍋に蓋をして蒸し焼きにしたもの。伝統の蒸し焼き料理、ホルホックに似た料理だった。夕食後、外に出てみると見事な夕焼けが待っていた。空のグラディエーションが少しずつ色合いを変え、形を変えていく。丘には無心に草を食む山羊のシルエット。そのシルエットが見えなくなるまで、時を忘れて見入っていた。

恐竜化石の谷・バヤンザク

翌日は南ゴビ屈指の人気スポット、モルトツオク砂丘とバヤンザクへ。バヤンザクは今回が初めての訪問だ。恐竜の化石がたくさん発見されているというバヤンザクには、こ

れまでも繰り返し行ってみたいと伝えてきた。しかし「遠すぎる」という理由で取り付く島も無く却下。それが今回ようやく実現した。おそらく道路事情がよくなったからなのだろう。

出発前に、メンバーの一人、生物学の教師であるHさんから、レクチャーを受けた。「専門外だけれど」と言いながらも、Hさんは植物や恐竜の詳しい資料まで用意してくれていて、さながらゲルで開かれた公開講座のようになっていた。

たくさん知識を得て宿営地を出発。まずはモルトツオク砂丘を目指す。乾き切ったガタガタ道を一時間半ほど、砂塵を巻き上げながらのドライブだ。「ああ、ゴビにいるんだなあ」と実感。到着すると、みな靴を脱いで砂丘に駆け登る。「アチチチチ」という声が聞こえてくる。ゴビの焼けた砂は、細かく熱い。それでも、砂丘の上では、みんな自分の年齢を忘れて壮大なお砂遊びにふける。

しばらく思い思いに砂丘で過ごし、いざバヤンザクへ。一時間たらずの道のりだ。茶褐色の台地が浸食により削り取られてできた谷。たくさん恐竜がこのあたりを闊歩していたらしい。その様子を想像すると、なんだかわくわくしてくる。今はほとんど植物など生えていないけれど、恐竜がいた頃は動植物の宝庫だったはずだ。

先へ進むに従って谷は形を変え、岬のようになっていった。ラクダの形に似た岩の近くに、ぼつんと咲く一輪の白い花を見つけた。この花は、恐竜が生きていた時代にも咲いていたのだろうか。



来た道に戻ると、鮮やかなモンゴリアブルーの空に、恐竜が口を開けたような雲が広がっていた。

宿営地への帰路、遠くにオアシスのような緑が見えてきた。近付くと、どうやら防風林で囲まれた畑のようだ。ポルト先生はドライバーに車を止めるよう指示する。トマトを買いたいらしい。シヤガイさんによれば、南ゴビのトマトはとても美味しく、ウランバートルでも人気があるそうだ。「ぼくも妻の実家を買って帰りますよ。みんな喜ぶから」と言う。

栽培農家に断りを入れ、トマト摘み用のバケツを持って

畑に入る。広さはざっと二ヘクタールほどか。トマトの他にジャガイモやネギなどを栽培している。乾燥地帯だけに、雨を頼りにはできない。近くの清水から水を汲んできて、畑に撒いて育てている。さぞかしたいへんな作業だろう。トマトは日本で栽培している様子とは異なり、ひざ丈ほどの茎葉にピンポン玉くらいのおおきさの実が見え隠れしている。ダランザドガドの市場に出荷したばかりらしく熟した実は少なかつたが、ゴビの大地でのトマト摘み体験は、実に瑞々しい思い出となった。

スーホの白い馬

翌日の夕刻、モンゴルの草原で朗読会を開くことになった。読み手は、子どもの頃に読んだ「スーホの白い馬」の世界に憧れて、いつかモンゴルに来てみたかったというSさん。せっかくモンゴルの大草原で読むのだから、傍らに白い馬、そして馬頭琴の生演奏が流れる中でやれたらいい。私は無理を承知でトクトホに頼んだ。最初は「白い馬はいない」とにべも無かつたが、「白っぽければ構わない」と伝えると「それなら」と、少し茶色味がかつた馬を連れてきてくれた。「黄色い馬だけいいか」というのだが、日本人から見れば十分に黄色でも茶色でもなく、白い馬で通ずる。馬頭琴の演奏は、馬頭琴の名手、トクシンだ。伝

統衣装を粋に纏う。ぶつつけ本番の生演奏。どんな物語なのか詳しい打ち合わせもないままに、絵本を横目で見つつ、Sさんの朗読に合わせて弾いてくれた。日本語が分かっているのではないかと錯覚しそうなほど、場面に合った曲調で弾く。白馬が追われて矢で射殺されそうになる場面では、突然、後ろの白馬がいなかった。馬に日本語が分かる訳はない。トクシンの奏でる馬頭琴の曲が、白馬のいななきを誘ったに違いない。

大草原での「スーホの白い馬」の朗読会。朗皆、感動していた。朗読した本人は、それ以上に感動したようだ。すべてが揃ったシチュエーションで聞く「スーホの白い馬」の朗読。気が付けば、私も涙していた。

馬頭琴を弾いてくれたトクシンはウランバートルの芸術大学に進み、馬頭琴奏者を目指



していた。しかし昨年、馬頭琴では食べていけないと考える大学を受験し直し、会計士を目指して勉強中。二年前、私たちを迎える長い詩を朗読してくれた三男のエンフトルは、バイクに乗って山羊を追っていた。まだあどけなさが残っていた五年生の少年も中学生。わずかの間に青年への階段を上り始めていた。気になったのは、長男のバートルの姿が見えないこと。兄弟の中で最も遊牧の仕事に向いていそうな、寡黙でたくましい青年だった。どうしているのか尋ねると、結婚してダランザドガドの町に住んでいると言う。遊牧生活を引き継ぐのはバートルだと勝手に思い込んでいたのだが、何があつたのだろう。結婚の話題に触れようとしないトクトホの様子からは、都会へ行ってしまった息子にあまりよい感情を抱いていないように感じられた。一見、変化が少なそうに見える遊牧生活だが、二年の間にはいろいろな変化があつたようだ。

変化といえば、トクトホのゲルの脇にソーラーパネルが二枚設置され、ゲルに入ると冷凍庫が鎮座していたのには驚いた。捌いた山羊の肉を保存するために使っているらしい。冷凍庫の隙間を使って構わないという配慮のおかげで、大草原の真只中でキンキンに冷えたビールを飲むことができた。ハンホンゴル村での滞在、八度目にして初めての経験である。

ソーラーパネルの恩恵は他にもある。日差しの強い日中なら、スマートフォンでもカメラでも自由に充電させてもらえたのだ。さらに驚いたのは、WiFiが使えるということ。ゲルにはルーターがあり、スマートフォンでWiFi接続を試みるとちゃんとつながった。大草原の生活にも大きな変化の波が押し寄せている。これが「よいことなのか」どうか、「超」が付く便利社会に住んでいる私たちがどうのこうのと言及するのは控えよう。「遊牧生活を送る人々にとって幸せに繋がっているか」で語られるべきことだから。私たち日本人が享受している便利さも、本当の幸せに繋がっているかどうか、改めて考えてみる必要があると思う。

闇の世界・ひと時の遭難

ハンホンゴル村の宿営地で過ごしたのは、満月に近い頃。月明かりのおかげで、夜、外を歩くのにライトはいらない。しかし深夜になると月は西の丘に隠れ、星が見え始める。月明かりと星明かりの光量の差はあまりにも大きく、月が沈めば足元の他は何も見えない漆黒の闇だ。

旅の後半、いつものごとく胃腸の調子が悪くなった私は、真夜中にトイレに行きたくなった。ヘッドランプを頼りに、百メートルほど離れた簡易トイレに向かった。用を足した

出て来たらしい。小さな明かりが灯台のように頼もしかった。その距離、わずか百メートルほど。ずいぶん離れてしまったと思っていたのに、こんなに近くにいたのだ。明かりに向かって駆け寄りたいところだったが、トイレに行つて帰れなくなったと知れたら恥ずかしい。ゆっくりと明かりの方へ向かう。そして何事もなかったかのように灯台の主に近づき、「月が沈んで、星がきれいに見えるようになってきましたね」と声をかけて、自分のゲルに戻った。

モンゴル人に近付けた…か

今回の旅でも、乗馬させてもらう機会があった。モンゴルの伝統衣装のデールと帽子、皮の長靴まで用意してくれた。そのいでたちで馬に跨ると、なんだか気分が違う。馬と一体になっているような感覚だ。トクトホと共に山羊を追い回しているうちに、ほんの少しモンゴル人に近付いた気がした。

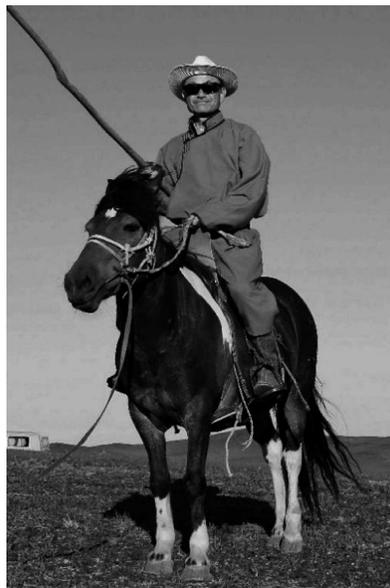
旅の終わりに、ウランバートルのカシミア店前のベンチに腰かけ、皆が買い物し終わるのを待っていた時のこと。モンゴル人の男性に道を尋ねられてしまった。モンゴル語で日本人だと伝えると、「おー、すまん、すまん」とばかりに笑いながら手を振って離れて行った。

二度目のモンゴル旅行となったBさん、Kさんは、ウラ

まではよかった。ゲルに帰ろうと立ち上がると、ヘッドランプの電池が切れて、闇の世界に包まれてしまった。帰るべきゲルがどこにあるのか、まったく分からなくなった。わずか百メートルほどの距離だ、方向さえ間違えなければ帰れるだろうと高をくくって、おおよその見当をつけてから歩き始めた。だが、行けども行けどもゲルにたどり着かない。少し角度が逸れたのかもしれない。方向を変えてまた歩き出す。十五分ほど歩き回っただろうか。完全に自分の位置が分からなくなってしまった。一キロメートルぐらいいは歩いたような気がする。少し不安になってきた。これ以上歩いても、ゲルから遠ざかるばかりなのではないか。そう考えた私は、ゲルに戻るのをあきらめ、日が昇るのを待つことにした。この辺りではもう狼は出ないと聞いているから、恐ろしいことも無い。ぼんやり光る蓄光機能のある腕時計の針を見ると、まだ午前三時。日の出は七時ごろだから、ほんのり明るくなるまで三時間ぐらいの辛抱か。膝を抱えて座ること三十分。時間が過ぎるのがやたらと遅い。そして寒い。気温はおそらく十数度。秋の冷たい西風が背中中に吹き付ける。Tシャツに薄いウインドブレーカーを羽織っただけなので、体はどんどん冷えてくる。

「参ったなあ」と心細くなってきた頃、小さな明かりがぼっと灯った。だれかがヘッドランプを点けて、ゲルからンバートルの楽器店でプロ仕様の馬頭琴を買った。Bさんは音楽を生業としているし、Kさんも音楽には造詣が深い。二人はBさんのスタジオで練習を重ねて、すぐに馬頭琴で曲が弾けるようになるに違いない。私は音楽が大の苦手だが、家には妻の馬頭琴がある。いつかBさん、Kさんと一緒に演奏できるようにになりたいものだ。そうすればさらに一歩、モンゴル人に近付けるかもしれない。

いや、それよりももっと大切なことがある。次の旅までには、もう少しモンゴル語を話せるようにならなければ。今度こそはと、幾度目かの決心をして旅を終えた。



(続く)